

現代韓国社会の受験と学歴を巡る「迂回的教育戦略」
－大卒の母親たちが語る教育観と教育戦略－

柳煌碩

東京大学教育学研究科

概要：本研究では、現代韓国社会を生きる大卒の母親たちの教育観および教育戦略をインタビューデータに基づいて検討することを目的としている。調査対象者である12名の母親たちは、韓国で高等教育がユニバーサル化した2000年代に大学または専門大学に進学している。インタビューデータを分析した結果、母親たちは教育と就職に関する個人的経験から、子どもの教育について次のような教育観および教育戦略を志向・支持していることが分かった。(1)母親たちは既存の「受験勉強」には否定的であるが、学歴獲得に対しては肯定的な教育観が見られる。(2)「受験勉強」へのオルタナティブとして「英語」と「読書」という教育戦略が明確に支持されている。そして(3)「受験勉強」のオルタナティブとされている「英語」と「読書」への取り組みが、学歴獲得に対しても有効であると認識されている。こうした現代韓国社会の母親たちが支持する教育戦略は、自らがくぐり抜けた既存の「受験勉強」によるストレスを回避しつつ、韓国社会において依然として重視される学歴価値を認識し、それを目指す「迂回的教育戦略」として捉えることができる。

キーワード：現代韓国、受験勉強、学歴獲得、教育戦略、ストレス。

*The "circumventional education strategy" in modern Korean society
－ Education view and strategy of university graduate mothers－*

Ryu Hwangseok

Graduate school of education

University of Tokyo

Abstract: The purpose of this study is to examine the educational views and strategies of university graduate mothers living in modern Korean society. The 12 mothers surveyed entered universities or colleges in the 2000s when higher education became universal in Korea. An analysis of interview data showed that mothers' personal experiences in education and employment indicated their educational views and strategies. (1) There is a negative view on the existing "study for entrance examination", while a positive view on achievement of educational attainment. (2) Educational strategies such as "English" and "reading" are clearly supported as alternatives. And (3) "English" and "reading" are also recognized to be effective in acquiring academic credentials. In conclusion, these educational strategies can be viewed as a "circumvention education strategy" that aim to avoid the stress of the existing "study for entrance examination" that they have passed through, while at the same time, realizing and aiming the educational value which is still recognized as important in Korean society.

Keywords: Korean society, study for entrance examination, credentialism, educational strategy, stress.

序論

2000年代初頭、韓国社会では高等教育機関の就学率がピークに達していた。1969年の「中学無試験制度」と1974年「高校平準化」によって大きく上昇した中等教育の就学率は、次第に高等教育の就学率上昇をもたらした。韓国統計庁(2017)によれば、1980年に16.0%だった高等教育機関への就学率は、1990年に22.9%、2000年に50.2%まで上昇し、2010年には66.7%を記録した。こうした高等教育の急速な大衆化は、女性に限るとより色濃く表れる。1980年に8.1%に過ぎなかった女性の高等教育機関への就学率は、20年後の2000年には46.1%に上昇し、2015年を堺に男性を上回り始めた¹。

言うまでもなく、これは大きな変化である。「娘に学校は要らない²」と言う社会風土が明らかに存在していた時代を生きた女性の娘たちは、今や同年代の男性と同様、もしくはそれ以上に高等教育を受けているのである。高等教育機関、とりわけ大学への進学する女性が増えたということは、言い換えれば、彼女たちがいずれ子どもを育てる立場になった際、子どもの教育への関わり方にも大きな変化が生じていることを意味する。少なくとも「娘に学校は要らない」と言われた彼女たちの母親世代と比べれば、現代を生きる大卒の母親たちは、子どもの教育に対する考え方(教育観)や教育支援の実践(教育戦略)の面において大きな違いがあると想定される。

本研究では、そうした観点に立ち、まさに2000年代半ばから後半にかけて高等教育を受けた、いわば「ユニバーサル化世代」の母親たちに焦点を当てる。そして彼女たちの受験、就職の経験や解釈が母親になった後の教育観や教育戦略といかに関連しているのか、また母親たちの教育観と教育戦略の中にある志向性や特徴は何かを検討することを目的とする。

1. 先行研究とリサーチ・クエスチョン

1-1. 先行研究

本研究で分析の対象とする親の教育観および教育戦略については、既に韓国国内において数多くの研究が存在する。

周知の通り、社会階層は、子どもの教育を巡る親の意識および支援行動に大きな差をもたらす要因である。韓国社会もその例外ではなく、教育部が近年発表した資料によれば、高所得層と低所得層の間における教育教育費(一人あたりの月間支出額)は約7倍の差があると報告されている(교육부 2015)。また、多くの研究では親の学歴が高いほど私費教育への支出額が増加し、その傾向は近年強まっていることが指摘されている(김경근 2005、이정환 2002、양정호 2003、김현진 2004)。

階層による差は私的教育費の多少のみならず、教育に対する意識と具体的な支援行動の様式にも表れる。教育支援活動に関する階層差を検討した이두휴(2008)は、上位階層が下位階層と比べて、積極的・没入的・具体的・管理的な教育支援を行っていることを指摘する。彼によれば、韓国における親の教育支援は「私費教育志向性」「母親主導性」「情報依存性」において階層間の明確な違いが表れる。類似し

¹ 就学率は、(各年度の就学者数/各年度の就学年齢の総人口)×100で表す。

² 戦後の韓国においては、子どもの性別によって投資される教育資源が大きく異なるという研究結果は既に蓄積されている(李 2018, 이미정 1998, 박병영외 2011など)。これらの研究では、「長男」に集中する教育投資の一環として娘たちの教育機会や教育費が犠牲にされ、さらに娘たちは教育を中断し就業することで、長男たちの教育費を賄っていたとされている。

た結果は、김미숙・상종열(2015)においても見られる。彼らは現代韓国における親の教育文化を「子女管理の文化」とし、その「管理の文化」に階層間の差があると指摘する。また、김혜숙・한대동・김희복(2017)の研究でも、階層間で教育支援行動が「積極的支援型」「現実対処型」「最小支援型」に分かれると述べられている。

子どもの教育に対する親の意識と実践の中で、特に注目すべきは、ミドルクラスのそれである。都市部に住むミドルクラスの母親(大卒)を対象に質的分析を行った황성희(2015)の研究では、その特徴について次のように述べられている。都市部のミドルクラスの母親たちは、学校での教育(授業)による学業達成を期待せず、学校外教育(私費教育)に学業成績の上昇を期待する。また、母親たちは学校の教師や、非効率的(入試との関連度の低い)授業の運営に批判的であり、学校のカリキュラムは形式的なものであると認識している。しかしながら、学校における評価については、受容的態度を表す。これに対し황は、親たちが学校教育の評価が持つ影響力を認識しているためであると述べ、学校教育に対する不信感を抱きつつも、学校教育による評価を無視できない状態の中で、私費教育への投資にその妥当性が与えられていると指摘する。こうした学校への不信感や、私費教育への妥当性付与という側面は、오경희・한대동(2008)や김양희(2009)の研究でも明らかにされている。

1-2. 先行研究の課題と本研究のリサーチ・クエスチョン

以上のように、現代韓国社会においては親の階層によって教育観と教育戦略における量的・質的違いが存在し、特にミドルクラスの親の教育観および教育戦略は、既存の教育システム(教育課程や選抜制度)に対する批判と、私費教育に対する依存という特徴があることが分かる。

しかし、こうした先行研究にある課題は、次のようなものが挙げられる。第一に、多くの研究では、親の教育観や教育戦略が階層再生産(上昇や下降回避)を意識したものである、という見方が共有されている。それに対して、子どもの教育に対する考え方や諸実践の具体性や複雑性に焦点を当てるアプローチは十分であるとは言えない。特に、親自身の教育経験がその後の教育観や教育戦略を形作る側面に対する考察は、例え質的な方法を使った研究であっても極めて稀である³。だが、例えば発達心理学における児童期の被養育経験と親の養育態度に関する研究(전현진・박성연 1999)が表しているように、親の個人的経験とペアレンティング(養育・教育)は極めて密接に関わっている。こうしたアプローチは、子どもの教育に関する意識や実践の社会学的研究においても有効であると考えられる。

第二に、現時点において子どもを育て、学校に通わせている親世代(特に小学生以下の子どもを持つ世代)の特徴を意識する必要性である。現時点において子どもを育て、学校に通わせている親世代は、韓国において最も大学進学率が高かった時代に大学に進学した世代である。そうした経験を持つ世代の親は、「大学卒」や「受験」についてそれ以前の世代とは異なった認識や行動様式を持つと考えられるが、そうした視点は、現代韓国社会の親(ミドルクラスに限っても)の教育観や戦略を捉える際に重要である。もちろん教育観や戦略に関する世代間研究は存在するが、戦

³ もちろん、親の教育観や戦略に焦点を合わせた研究は、本文で触れた通り量・質的方法を問わず共に存在するが、それらの研究の分析上の枠組みが階層論に強く依拠している点は否めない。端的な例として、韓国の教育社会学会の会誌である『教育社会学研究』においても、階層論に基づいた教育意識研究は、そうでないアプローチと比べ多くの比重を占めている。本研究で問題視しているのは、そうした認識論の故に見落とされている側面についてであると言える。

前生まれの祖母と 60-70 年代に生まれた母親の養育態度を比較した 이하정(2005)が指摘しているように、子育てや教育に関する従来の世代間研究では、世代間同質性、つまり「転移」の側面に主眼が置かれてきたのが事実である。しかし、一概に「教育熱心」だと捉えられるには、韓国の急激な社会変動に伴う教育を巡る世代間の経験と認識の差は大きいと考えられる⁴。

以上のような先行研究の課題を踏まえ、本研究では、現代韓国における大卒女性(都市部のミドルクラス)の教育観および教育戦略を検討するためのリサーチ・クエスチョンを以下のように設定する。

- ①：母親たちは、個人的経験を介して学校教育や受験に対してどういう認識(教育観)を持っているのか。
- ②：母親たちが支持する教育戦略はどのようなものであり、どういう特徴があるのか。
- ③：母親たちの教育観と教育戦略は、いかに関連して意味づけられているのか。

2. データと分析方法

本研究で用いるデータは、2016 年と 2017 年に行った育児期の大卒女性に対するインタビューデータである。調査対象者の選定においては、①女性の高等教育機関への進学率がピークに達していた 2000 年代に高等教育機関を在学または進学していること、②居住地域がソウルまたは京畿道の都市部であること、③年間家計収入が 8 千万ウォンを超えないこと、を主な基準とした。

2016 年に行った一回目の調査(K1~K6)では、就学前の子どもを持つ 30~35 歳の大卒女性を対象に調査対象者の選定を行った。その後、一回目の調査で得られたデータに一次的なコーディングとカテゴリー化を行い、2017 年に行った二回目の調査では調査対象者の選定と質問内容の両方においてより子どもの教育に焦点化したインタビューを行った。調査対象者の概要は以下の表 1 の通りである。

<表 1 調査対象者の概要>

	年齢	学歴	職業	夫年齢	夫学歴	夫職業	居住地	子ども(年齢)
K1	31	大学卒	事務	40	大学卒	事務	京畿道	男(4)、女(2)
K2	32	大学院卒	主婦	31	大学院卒	事務	ソウル	女(3)、女(0)
K3	30	大学卒	主婦	37	大学院卒	事業	ソウル	男(5)、女(0)
K4	37	大学卒	放送業(育休中)	44	高卒	事務	ソウル	男(3)
K5	35	大学院卒	弁護士	44	大学院卒	弁護士	ソウル	女(5)
K6	36	大学卒	事務	39	大学卒	事務	ソウル	男(7)
K7	35	大学院卒	作家	39	大学卒	事業	京畿道	男(4)、男(0)
K8	40	専門大卒	看護師	40	専門大卒	運送	ソウル	男(9)、男(7)
K9	39	大学卒	事務	38	大学卒	事務	ソウル	女(9)、女(5)
K10	37	大学卒	事務	38	高卒	警察	京畿道	女(10)、男(7)
K11	35	大学卒	事務	45	大学卒	事務	京畿道	女(5)
K12	37	大学卒	事務	40	大学卒	事務	京畿道	女(7)、女(4)

⁴ 子育てを巡る世代間の差は、子どもの価値(VOC)や親の養育態度に関する世代差研究(권용은・김의철 2004, 오혜진・주경란 2004)において既に検証されてきているが、これらは就学前の乳幼児を持つ親を対象とした研究であり、子どもの教育あるいは学力・学歴獲得という側面を含むものではない。

表1の通り、調査対象者は全員高等教育機関を卒業している。K8だけが日本の短大に当たる「専門大学」を卒業しており、他の8名は4年制大学卒業、3名が大学院で修士号を取得している。また、夫はK4とK10を除いた全員が高等教育を受けている。

居住地に関しては、7名が首都ソウル、5名ソウルの外部に当たる京畿道に居住しているが、いずれも3~40分以内にソウルにアクセスできる距離にある都市部地域である。

職業に関しては専業主婦が2名、育児休暇中が1名、残り9名がホワイトカラーフルタイム職に就いている。夫は全員フルタイム職で、弁護士であるK5の夫と、運送業に就いているK8を除けば全員事務職である⁵。

実際の調査では半構造化インタビューを行った。事前に設定した質問項目は、調査依頼書の中に掲載し、質問項目と調査の意図(およびボイスレコーダー使用、論文掲載への許可)と概要を読んでもらい、承諾を得た上でインタビューを行った。事前に設定した質問の内容は大きく以下の4つである。また、インタビューにおいてはこれら4つの質問に対する調査対象者の語りに応じて、追加的質問を行った。

- ①子育て・教育に関して今最も気になっていること
- ②子どもの教育に関して持っている信念
- ③子どもの教育に関する将来的計画や期待
- ④自分の生き立ちと現在の子育ての比較

データの分析とその解釈の作業は、明確に分離することなく、データとコーディングと解釈を反復的に行った。具体的な分析においては、Strauss and Corbin(1998)に習い、抽象度の低い一次的なオープンコーディングを通じて口述データをセグメンティングし、より抽象度の高い二次的(焦点化)コーディングを行った⁶。さらに焦点化コーディングの過程で母親たちの教育観と教育意識を概念的に説明できる「中心現象」を導出し、それを基準にした「ストーリー構築」を行った。なおコーディングを含めた分析過程全般においてはMAXQDA12を使用した。

3. 分析

本研究の冒頭で述べたように、2000年代初頭は、韓国において大学就学率がピークに達した時期であった。本研究で取り上げる12人の母親たちは、1979年~1989年の間に生まれ、概ね2000年代に高等教育機関に進学した世代である。同時に、彼女たちは、現行(1994年から開始した)の大学入試制度である「修学能力試験」を経て高等教育機関に進学した世代でもある。

⁵ 仕事と家庭での子育てのバランスを考えると、本調査においてフルタイム職に就いている母親が多くを占めていることは、私費教育の利用率の面で感化できない事実である。実際K1、K8、K9、K10は、仕事によって十分に子育てができていないことに対する「罪悪感」を語っていたが、フルタイムという勤務形態そのものによって教育観や教育戦略が形付けられている様相は、少なくとも本調査では見られなかった。

⁶ Straussらの方法は、最も多く援用されるGTAの一つであると言えるが、コーディング方法や順序、そして実際の報告書および論文の執筆手順については、その方法論を巡って様々な立場が存在する。例えばCharmaz(2006)はStraussらの厳密な軸コーディング法と記述方法を支持せず、それを「強要された分析枠組み」とするとするし、Creswell(2012)もStraussの方法論における諸手順を厳密に再現する必要はないことを説明している。

本研究の調査対象者が持つそうした同質性(調査対象者との間、調査対象者と子どもとの間)は、彼女たちの教育観を考える上で重要である。彼女たちが持つ受験の経験は、子どもの将来に対して抱いている展望や教育観に対して「実際の経験に基づくものである」という主観的妥当性をもたらす。ここで注目したのは、その「実際の経験」が果たす妥当化機能そのものよりは、「実際の経験」によって教育観・教育戦略が形成され、意味づけられる様相と、その中にある葛藤と矛盾についてである。

3-1. 「受験否定」と「学歴肯定」が共存する教育観

大卒母親の教育観においてまず注目したいのは、受験勉強や大学入試を至上の価値とする教育文化への拒絶反応である。具体的な発言が見られなかったK1を除けば11人全員の教育観には、いわゆる「受験勉強」やそれを意識した教育支援は前提として否定されている。12名の調査対象者の中で学歴と職業両方において最も上位に位置するK5の語りはそれをよく表している。

K5：私は今考えると、はぁ…本当に勉強を頑張ること以外のことは全部切り捨て、そういう風に勉強してたんですね。…そうやって全部、勉強とか試験にかけて来たんですけど、だからとって今、私が他の人よりすごく幸せだとか、すごくいい暮らしをしてるかと言ったら、そういうことはない気がします。むしろ無くしたもののほうが多い気がしますしね。

このK5の語りにおける「幸せではなかった」という感覚を、K11も語る。ソウルにある有名私立大学を卒業し、国家公務員として働くK11は、受験生だった過去が「不幸だった」とし、その結果「受動的な人間になった」と振り返る。

K11：自分の学生時代を振り返ると、その時の私は全然幸せではなかったと思います。私は、本当不幸だったと思います。だって小学校から高校まで、12年でしょ？長いじゃないですか。でも、私はその長い間、ずっとストレスにさらされていたんです。…実際(大学に)行ったら、自分の意思では何もできなくて、時間割も組めないし、空きコマがあったら、もうその時間に何をすればいいのかも分からない。完全に受動的な人間だったんですね私は。「あー私は自律性がまったくないんだ」と感じてそういう自分がイヤでした。

K5とK11の「受験否定」の他にも、母親たちが語る「受験否定」には幾つかの類型とそれに付随する理由がある。それらは以下の表2のように4つに分類できる。

<表2 「受験否定」の類型と理由>

タイプ	発言者	内容	理由
学歴至上主義	K7, K11, K12	学歴や学校歴の獲得を目標とする学習・教育文化への否定。	実体を伴わない、能力を反映しない、仕事に使えない。看板のための虚実であるから。
暗記・詰め込み主義	K4, K6, K7, K11,	受験での成功を実現させるための暗記・先行学習中心の学習風土への否定。	勉強そのものをつまらなくさせ、学習過程における創造性、能動性、思考力を奪うから。
競争と心理的ストレス	K2, K3, K4, K5, K7, K8, K11	子どもにかかる受験への圧迫感と過度な私費教育による精神的疲弊への否定。	子どもらしさ、遊ぶ時間、勉強以外の活動の価値を奪うから。
画一的で競争的入試制度	K5, K7	受験競争を促す、または複雑化する入試制度への否定。	受験のプレッシャーによって心身の健康を奪うから。

表2で表しているように、母親たちの「受験否定」は、「学歴至上主義」「暗記・詰め込み主義」「競争と心理的ストレス」「画一的で親競争の入試制度」の4つに大分できる。また彼女たちは、これらの否定的認識に対する理由も語っている。

第一に、いわゆる「名門大学」を至上の目標とする教育文化や実際の教育支援の結果として得られる学歴(学校歴)は、実体(本人の実力や業務上の能力)を伴わないものであるとされている。また、それらは社会(仕事)の現場において役立たない「看板」でしかないと認識されている。

第二に、暗記主義的方法や蔓延した先行学習重視の学習風土については、それが子どもたちに学習を退屈なものにさせ心理的ストレスの元凶であるとされている。またそうした学習方法は、子どもたちの創造性や能動性の形成を妨げるとも否定されている。

第三に、入試を控えた子どもたちの心理的圧迫感、また入試に備えて行われている過密なスケジュールの私費教育は、子どもたちの精神的・身体的疲弊をもたらすと批判されている。こうした批判は、近年複雑化してきている大学入試制度に対しても向けられており、遊ぶことや受験勉強以外の様々な文化的体験の重要性が失われていると母親たちは問題視している。

だが、こうした韓国社会の教育文化および教育システムへの批判や否定的認識はそれほど新しいものではない。韓国社会において学歴・学閥主義への批判、またその主たる原因としての入試制度への批判は、社会的世論やマスメディアにのみならず繰り返し見られており、それは韓国の学界(例えば教育社会学会)においても同様である(キムジョンウォン 2017)。

ここでフォーカスを当てたいのは、「受験否定」という教育観の存在それ自体よりも、次のような側面である。第一に、ここで見られる「受験否定」が語られる文脈である。先述のK5とK11の語りのように、彼女たちが語る「受験否定」は単なる印象論や建前(「私は子どもの教育にむやみに・甚だしく取り掛かる母親ではない」といったようなもの)ではない。それは、受験生だった自らの個人史と積極的に結び付けられた、いわば自己反省的な教育観である。

第二に、「受験否定」が彼女たちの教育観において占める位置である。後述するように、彼女たちの教育観は、「受験否定」だけで埋め尽くされているわけではない。つまり、上述のK5やK11が語っているように「幸せではなかった」受験の経験(そして表2における「受験否定」)が、直接「学歴無用論」あるいは「脱受験」的な教育観を意味するわけではないことに留意が必要である。

本研究で取り上げる母親たちは、教育的・職業的選抜構造において一定程度の「成功」を収めた立場にいると考えられる(少なくとも、結果としての現状に基づけば、客観的な意味で学歴・職業達成の過程において失敗しているとは言えない)。それ故、自らが手にした現在の職業(経済的に安定し一定程度の社会的評価受ける)に比較的上位の学歴がいかにか作用しているかについて、彼女たちは自覚的である。有名私立大学を卒業し、現在は作家として働きつつ博士課程にも在学しているK7の語りはそれを色濃く表す。

K7: …私は、自分がしたいことをして生きている、そんなに数は多くない人間の一人だと思うんですね。小さい時からの夢を仕事にしているんですけど、韓国社会で学歴とか学力って、やはりものすごく大事だなと感じます。私は学歴とかいい大学の卒業証書が要らないと言ってるわけじゃなくて、そうい

うものを通じて子どもが劣等感とかストレスを感じないで生きてほしいなという思いなんですよ。…例えば、子どもを小学校に通わせる時に学業的なストレスを与えないと塾とかを全く通わせないで、結果的に社会から淘汰されてしまったとすると、じゃあ子どもが幸せだろうかって思うんですよ。

同様の考えはK11の語りでも見られる。彼女は、自分と夫(同様にソウルの有名私立大学卒)の学歴がいかに社会的評価と仕事に肯定的影響を与えているかについて語る。にもかかわらず先述したようにK11が自身の受験の経験を「不幸だった」、「受動的人間になった」と語っていたことは興味深い。一見、矛盾しているように見える語りだが、彼女たちの教育観においては、受験そのものと学歴の獲得に対して異なった認識が明らかに共存している。

K11: (大学を卒業して良かったのは)今考えると、ちょっと自慢できるってことですかね。「あ、あの子、〇〇大卒らしい」とか言われるような。認められるって感じですかね。社会的に自分を認められる、そういうのはある気がします。あと、私の旦那も〇〇大学というそこそこいい大学を出たんですけど、彼もその学歴の恩恵を受けましたね。〇〇という大企業に入れたのは、そのいい学歴がなかったら無理なので。

以上のような「受験否定」(特に表2で表した理由)は、本研究の調査対象者である母親たちが持つ「望ましい」教育観と密接に関わっている。つまり、「受験否定」の3つの理由を裏返せば、そこに親たちが「良い」とする教育上の信念が表れると考えられる⁷。さらに、その上に上述のK7とK11の語りのような「学歴肯定」の内容を加えると、母親たちの教育観には、以下の表3で表しているように4つの志向性があることが分かる。

<表3 母親たちの教育観における志向性>

タイプ	特性	内容
実体性、職業性	「学歴至上主義」からの反動	試験対策としての能力ではなく、仕事(就職や業務)の実際において役立つ能力を身につけること
創意的で能動的な人格	「暗記・詰め込み主義」からの反動	自分の意見や適性を発揮し、自らの進路決定を行うこと。
受験ストレスからの解放、オルタナティブな学習	「受験競争・心理的ストレス」 「画一的・競争的入試制度」からの反動	競争によるストレスを受けないこと。また、既存の大学入試に囚われない学習を行うこと。
学力・学歴の獲得	「学歴肯定」の継承	教育的選抜において必要とされる学力と、職業的選抜において必要とされる学歴を獲得すること。

この4つの志向性は、彼女たちの教育戦略を説明する重要な志向性である。次は、これらの志向性が、いかに彼女たちが実際に行っている子どものための教育戦略や計画に表れているのかについて検討する。

⁷ 親たちが持つ学校教育に対する批判的認識は、既に本研究で取り上げた先行研究においても見られる。しかし、そうした批判的認識を掘り下げれば、そうした学校教育批判は「では、何が望ましいのか」という教育観を映し出すものでもあると考えられる。

3-2. 「オルタナティブ」な教育戦略としての「英語」と「読書」

「受験否定」と「学歴肯定」が共存する教育観(そしてその中にある4つの志向性)は、調査対象者たちが行っている私費教育や今後の計画(以降「教育戦略」とする)と密接に関わっている。

結論を先取りすれば、最も一貫した支持を得ている教育戦略は「英語」と「読書」である。だが、この「英語」と「読書」の語られ方には一つはっきりした特徴がある。それは、「その代わりに」「だけど」といった具合に「受験否定」の後に接続された形式で語られるという特徴である。つまり、「英語」と「読書」は、様々な弊害をもたらすと語られた「受験勉強」の「オルタナティブ」な教育戦略として捉えられているのである。「英語」と「読書」に対する母親たちの評価は極めて肯定的であり、そのための投資や意欲は、「受験勉強」に対する冷淡さとは対照的である。

3-2-1. 「英語」

母親たちが目指す「英語」は、自らが受けてきた「受験英語」とは区別された、「実用的な英語」である。「実用的な英語」は二つの位相がある。一つは、実際の会話場面で使えるという意味の「実用的な英語」、もう一つは、実際の社会(就職や業務)において発揮する能力という意味の「実用的な英語」である。

小学校1年生の娘にネイティブ講師による少人数の英語レッスンを受けさせているK12の語りは、「実用的な英語」に向けた教育戦略が、いかなる反省と期待に基づいているのかを表す。

K12: その代わりに、すごく欲があるのは、英語です。英語って、私たち12年も勉強しても、正直外国人と簡単な会話も難しいじゃないですか。なんとか読めたりしたとしても。結局、その12年の英語って試験用の英語でしかなくて、それって本当に無駄だと思うんですね。だから、子どもが将来どういう仕事をするか分からないですけど、最低でも英語だけはできるように、ちゃんと外国の人と話せるようにはさせなきゃと思ってるんですね。

K11も夫の昇進、自らの受験などの経験を例に挙げながら、「実用的な英語」の必要性と期待を語る。

K11: さっき言おうと思ったのは、私と旦那が一番大事だと思っているのは、実は英語なんです、英語。私たち、英語にはけっこうやる気で、なんでかという、例えば、旦那があの大企業で昇進とかが遅れていたのは英語ができなかったからなんです。基本的な文法とかはある程度分かってても、会話ができないし、実際の仕事にも使えない。だからそれには憧れもあるし、劣等感もあるんですね。二人とも...

Q(調査者、以下同): じゃあ、英語にはかなり今意欲的なんですか?

K11: あ、はい、それにはもう、すごく意欲的です。できるかぎりさせたいなと思っています。

こうした「英語」に対する意欲と期待は、私費教育と不可分な関係にある。実際に12名の母親たちの内、英語に関する私費教育を行っていないケースは、K1とK2のみであり、他の母親たちは、英語塾や通信教育(K3、K6、K8、K9、K10、K12)のみならず、英語幼稚園(K4、K5、K7、K9、K11)、そして早期での留学(K8)も検

討している。

「実用的な英語」への意欲は、K11とK12の語りでも表れているように、彼女たちがかつて取り組んできた「古い英語」としばしば対比される⁸。「試験用の英語(K12)」と形容されているように、「受験英語」は「実体性・職業性」を欠いた受験勉強の典型として認識されているのである⁹。言い換えれば、そうした反省に基づく「実用的な英語」への取り組みは、「実体性・職業性」を伴う教育戦略として認識されている。

したがって、「実用的な英語」への取り組み、言い換えれば「英語が喋れる子に育て上げること」は、「古い英語」に欠けていた「実体性・職業性」を満たす教育戦略であると言える¹⁰。

3-2-2- 「読書」

他方で「読書」は、受験勉強に欠けている「創意的で能動的な人格形成」や「受験ストレスからの解放、オルタナティブな活動」を満たす教育戦略である。「本を沢山読むこと」、「本を沢山読んであげること」、「本を好きにさせること」に大分できる教育戦略としての「読書」へのポジティブな評価は、「実用的な英語」へのそれと同様に明確である¹¹。

以下のK4とK7の語りはそれを明確に表している(他に「読書」へ取り組み、または肯定的に語ったのは、K3、K6、K10である)。通塾そのもの、受験ストレスに対する拒否感を色濃く表現していたK4は、「本さえ読んでいけば良い」とも言える教育戦略を持っている。

K4: 私は子どもを育てることにに関して、本をすごく大事にしてるんです…
「子どもって遊ぶだけでいい」とは思わないんですけど、でも小さい時から塾に行かせたり、色んなことを制限してストレスを与えたりしたくはないですね。私は、「子どもは本と遊ばばいい」と思ってます。それで充分だと思いますね。なので、塾とかに行かせて勉強させるより、家で本を読んであげればいいし、聞かせればいい。それを、自然に子どもが受け入れるようにさせたいですね。

K4は、「読書」が様々な精神的ストレスを伴う塾などでの学習を代替できるものとして捉えている。「本と遊ぶ子どもに育てること」は、既存の「受験」の構造による弊害を避けつつ学力を付けさせる代案として認識されているのである。

また、受験に向けた学習法と創意的な人格形成を巡って混乱しているというK7も、読書に関しては以下のような明確な「信念」を語る。

⁸ 신동일・김주연(2012)においても、英語教育への認識は、親たちの経験(英語教育に対する補償心理など)によって形成されていると指摘されている。

⁹ 「英語」への高い意欲は、学歴だけでは職業達成が困難になり「スペック」が重要性を増して行った彼女たちの社会経験、あるいは時代的状况をも映し出すという解釈も可能だろう。

¹⁰ もちろん、英語は学力テストや大学入試、そして就職において依然として極めて重要な科目・能力であり、その点を母親たちもはっきりと認識している。これについては、本文の4.で詳述する。

¹¹ 「読書」に対する親たちの肯定的な評価は、単に読書に学習効果を認識しているからとは限らず、政府や言論、市民団体などによる社会・文化的要因からの影響も大きいと考えられる。「読書流行」の文化的構築性と私費教育化に関しては이연옥(2004)において詳しく検討されている。

K7: 時代が激しく変わってるので、子どもに何を優先的に教えればいいのかを巡って混乱はやっぱり大きいですね。それでも信念をもって教えているのは、読書ですね。なので、本を沢山読む訓練をさせているんですね。私は、「とりあえずたくさん読めば読むほど良い」というのを信じてて。人によっては一冊を深く読むとか言うんですけど、子どもはそういうのに慣れてないし、たくさん本に触れて、それによって創意力を高められると思います。そのために色々投資もしてますし、これからもしたいです。

「英語」のそれと同様に明確に表れている「読書」への期待と意欲だが、ここで注目したいのは、「英語」の場合と同様に、その語られ方である。上述のK4とK7の語りで表れているように「読書」は、一つの教育上の戦略である。第一に、「読書」も「受験勉強」と対比されているが、ここで「読書」は、受験ストレスを受けないが、学習成果に正の効果をもたらすものとしても語られている。また、「読書」は受験勉強では育めない「創意性、能動性」を向上させるものであるとも認識されている。

第二に、教育戦略としての「読書」も、英語の「ネイティブ講師によるレッスン」や「早期留学」がそうであるように、より効果的な方法論あるいはより専門的環境や知識を必要とする。以下のK4の語りはそれを端的に表す。

K4: 最近知りたいなと思ったり、ほしいなと思うのは、読書に関することですね。色々な情報が欲しいなと思っていて。ちょっと矛盾しちゃうんですけど、私って、他の私費教育とかはさせなくても、本にはお金をかけたくて。沢山読むようになって欲しいし。子どもが家でも沢山本に触れるようにさせたいし、その時に、「いい本の選び方」とか「子どもがもっと本を吸収する方法」みたいな？本も読む方法があると聞いたので。だから、そういうのを知りたいなと思います。本を好きにさせる方法とか、本を読む習慣をつける方法とか、家庭環境の作り方とか。そういうのは知りたいです。

K4の語りにおいて語られるニーズ、すなわち「子どもがもっと本を吸収する方法」、「正しい読み方」、「読書を習慣化させる方法」、「家庭環境の作り方」といった情報は、彼女が持っていない、専門化された知識とされ、その知識を親が習得することによって「読書」のための「環境」を設けることができるとされているのである。

このような「読書」への取り組みは、いわば「本が好きな子どもに育てること」そして「子どもが自発的に、沢山の本を読むようになること」を目指す教育上の取り組みである。教育戦略としての「読書」は、学校教育で必要とされる学力を補いつつも「創意的で能動的な人格」と「受験ストレスからの解放、オルタナティブな学習」の志向性を満たすものとして意味づけられているとすることができる。

4. 迂回的な教育戦略

以上のように、「英語」と「読書」を軸とした教育戦略は「受験否定」という教育観に即したもののように見える。「英語」や「読書」に関する母親たちの語りは、この二つのオルタナティブな教育戦略がいかにか「脱受験」的志向性を含んでいるかを表している。この「脱受験」的な教育戦略においては、共通して忌避されている

ものがある。それは「ストレス」である。このストレスには二つの位相がある。

一つは、学習過程におけるストレスである。母親たちの語りにおいて「受験英語」と対置された「実用的な英語」への取り組みは、教科書を読み、文法を覚え、試験で達成度を測る学習とは異なった、早期の環境(「英語幼稚園」のような)による無意識的な習得が目指されている。

創意的で能動的な人格形成を度外視し、知識の一方的な詰め込みと認識される「受験」とは対比される「読書」の場合も同様である。母親たちは「本を好きにさせる方法」や「親が沢山、正しく読ませる方法」を通じた自発的読書を目指していた。これは、受験競争による能動性や創意性の欠如も去ることながら、一方的な知識の詰め込みからくるストレスを子どもが自発的読書を通じて回避できるという考えが組み込まれていると考えられる。

もう一つは、進路選択に関するストレスである。これは、「学歴達成というストレスから開放された進路選択」を志向する姿勢である¹²。「将来、子どもがどのように育ててほしいですか」という調査者の質問に対して最も多くの返ってきた返事は「学業と学歴へのストレスを受けないで育ててほしい」、「好きなことを目指してほしい」というものであった(K2、K5、K7、K9、K11、K12)。興味深いのは、「英語」と「読書」に非常に意欲的だったK7とK11も、子どもの招来についてはそうした「子供中心的」将来像を語っているところである。

K7：私たちが望むのは、そんなに子どもが社会的に？我々がよく使う「成功」という範疇に入らなくても、子どもが幸せになって、自分がしたいことを探せて、それをやって行けたらいいなというのがある。なので、子どもができるだけストレスを受けないように、まずは子どもに成績についてのストレスとか、過度なプッシュをしないように気をつけてます。

K11：自分が子どもだった時は、大学とか自分の進路について何も考えてなかったし、ストレスばかり受けて、本当に辛かった。だから(子どもは)自分がしたいこと、なりたいこと、聞きたいこと、見たいこと、そういうのを最大限尊重されながら生きて行ってほしいです。

このように、母親たちの語りからは、既存の選抜試験を意識した学習過程と学歴達成を意識した進路選択において子どもにかかるストレスを積極的に回避しようとする意識が見られる。「英語」と「読書」への重視は、学習方法の面においても既存の受験構造における学習方法を否定するものであったし、「試験での成績や学歴に囚われず、したいことをしてほしい」という将来に対する期待も、「学歴社会」と言われ続ける社会の画一的な進路選択文化を否定するものである。

しかし、ここまでの内容だけだと、母親たちの「脱受験」的な意識は、3-1.で述べた「学歴肯定」という教育観、あるいは「学力・学歴獲得」という志向性とは相反するよう見える。だが、母親たちが「英語」と「読書」に込めた意味、あるいはその背後にある期待は、単なる「脱受験」的なものではない。そこには、学歴獲得による社会経済的地位の達成という、既存の学歴主義的価値観と親和的な意味

¹² 韓国教育開発院(2018)の「教育世論調査」によれば、「もし子どもが学校教育を拒否する場合、正規的教育課程の代案を探す」という質問に「はい」と答えた親(小・中・高の子どもを持つ)は、2001年に23.9%だったのに対し、2018年には57.0%を記録している。

と期待も込められているのである。

特にそれは「職業」や「地位」に関する語りで顕著に現れる。「将来的にどのような仕事や社会的な位置についてほしいですか？」という調査者の質問に対し、母親たちは「経済的な困窮を経験しない、社会的に一定程度の評価を受ける地位を得て欲しい¹³」という、一見「受験でストレスを受けないで、好きなことをして欲しい」という意識と矛盾しているような考えを語る。

「英語」と「読書」は、この矛盾しているように見える「受験の回避と学歴の獲得」という二つの考えを繋ぐ役割を果たす。例えば、月に15万円程度の「英語幼稚園」に娘を通わせているK9の語りは、「英語」が共存する二つの意識の中でどう位置付けられているのかを表している。

K9: 実は私は、子どもの頃って勉強も大事だけど、子どもが友達と楽しい時間を過ごしたり、自由な時間を過ごしながらか育ってほしいなと思います。そういうのがあるから、仕方なく折り合いをつけなきゃいけないというか、その折衷案が英語でした。教科書とかで暗記したりするんじゃなくて、英語幼稚園から始まって、もっと自然に、自由な感じで身につくようにさせようと思って。だから、できれば中学までは、自分たちで英語を頑張っ習って、高校は外交国語高校に行ったり、それでその後大学もソウルにある大学に行っほしいなというのがあります。

Q: ソウルにある大学というのは…

K9: だから、ある程度の評判？社会的に認められてる大学ですね。やっぱりこの国は、いい大学を出れば、絶対じゃないとおもいますが、やっぱりいい大学をでればそれだけ楽に暮らせる、そういうのが多いじゃないですか。だから。

K9の語りにおいて重要なのは、「英語幼稚園で自然に習う英語」が外国語高等学校¹⁴という上位校への進学と結びついて語られている点である。外国語高等学校は、韓国の「高校平準化政策」において高校間の序列が見えなくなった一般の高等学校とは異なって、特定の高い威信を持つ「特殊目的高校」に属する学校である。その名前から分かるように外国語能力が入試において最も高い比重を占め、大学入試やそれ以降の就職活動においても平準化された高校と比べ高い評価を受ける。こうした上位校への進学を意識することは、K9の「英語」への取り組みが、単なる「受験否定」ではなく、既存の教育システムの中にある上位校(外国語高等学校と「ソウルにある大学」)への進学という「学歴肯定」とも繋がっていることを表している。

もう一つの教育戦略である「読書」も同様に、既存の教育・選抜システムとの接点を持つ。その接点の片方にあるのは、現行の大学入試制度における「論述試験¹⁵」

¹³ 韓国教育開発院(注9と同資料)よれば、「成功した子育ての意味」としては、「子どもが良い職場に就職した」が25.2%で一位であったのに対し、「子どもが望む仕事、好きな仕事に就いた」は18.4%で3位であった。

¹⁴ 他に「特殊目的高校」には、「科学高等学校」「国際高等学校」「マイスター高等学校」があるが、「科学高等学校」と「外国語高等学校」は中でも特に入学難易度が高いとされる。

¹⁵ 現行の大学入試制度は、日本のセンター試験に当たる「修学能力試験」を通じた枠(「定時」枠と呼ばれる)と内申点や「論述試験」の成績を通じた「随時」枠が存在する。特に「論述試験」は「随時」枠でも比較的その比重が高いとされている。

である。日本の「小論文試験」に当たる「論述試験」は、現行の大学入試制度、特に「随時枠」においても極めて重要な試験科目であるが、この「論述試験」と母親たちの教育戦略としての「読書」との関係は、以下の K4 の語りにおいて表れる。

K4: まだ韓国って、どこ(の大学)に行こうとしても試験を受けないといけな
いですしね。今は色々な枠があると思いますけど、随時で入る子って最近本
当に多いです。だから、小学校高学年とか、中学生になったら、やっぱり
そういうのを気にして、対策を立ててやっていけないのかなと思
います。

Q: 対策というのは具体的に…

K4: うーん、まずは普通の勉強も大事だと思いますけど、最近だと論述がす
ごく大事だってずっと言われてるじゃないですか。だから、本を沢山読むと
か、色んな分野の本を読んで、読む、書く、考える、みたいな能力を伸ばす
のが一番かなと思いますね。

以上のように、「自然に実用的な英語を身に着けさせること」と「本を好きにさ
せ沢山読ませること、読書によって創意性を育むこと」は、「外国語高等学校に進
学すること」と「論述試験で良い結果を残すこと」と密接に関わっているのである。
言い換えると、母親たちが支持する「オルタナティブな」教育観や教育戦略は、既
存の教育・職業の構造、とりわけその既存の教育と職業における選抜システムの枠
の内にあるものである。

その意味で、「英語」と「読書」に資源を投入する教育戦略は「迂回的」なものである。
迂回すべき対象は既存の受験体制による学習や進路選択のストレスであり、迂回する媒体は「英語」と「読書」である。そして迂回した先の目的地は、既存の学歴主義的価値観に立脚した社会経済的地位の獲得なのである。

5. 結論

以上のように、本研究で取り上げた現代韓国社会の母親たちは、既存の学校教育の内容や選抜システムがもたらす「弊害」を語り、それらに極めて批判的・懐疑的な立場を取っていた。しかしその一方で、自らが手にした学歴と職業の経験から、学歴の達成を通じた社会経済的地位達成の効用に対しても、彼女たちは自覚的であった。以下では、本研究での分析を冒頭で述べたりサーチ・クエスチョンを踏まえながらまとめることにしたい。

第一に、母親たちの「受験否定」と「学歴肯定」が共存する教育観は、「受験経験はさせたくないが、受験での成功は必要である」というものであると言い直すことができる。母親たちは、学歴の効用をはっきり認めた上で、あくまでその方法論における「オルタナティブ」を求めている。そしてその「オルタナティブ」な方法論として広く受け入れられているのが「英語」と「読書」であった。

第二に、母親たちの教育戦略において焦点化されていた「英語」と「読書」は、「環境による無意識的吸収を通じて得られる実用的能力」であると言える。一方、従来の受験勉強とそれによる学力は、「個人による意図的努力を通じて得られる非実用的能力」として批判的に捉えられている。これは、母親たちの受験経験、特にそれに対する批判的な解釈の故のものであると考えられる。母親たちが語る教育戦略とそこに込められた意味は、個人、とりわけ子ども本人の心身の努

力や労力の代わりに、専門化された環境に子どもを入れることで既存の受験によるストレスを「迂回」すること、あるいは「好きになる」「好きなことをする」といった「心理的原動力(ストレスへの防御力)」を持たせることを目指すものであると語る。

第三に、母親たちの「オルタナティブ」な教育戦略は、大学入試や大卒という学歴主義的価値観とは無関係に構成されているわけではない。むしろ、母親たちの「オルタナティブ」な教育戦略は、現行の入試制度における達成や学歴獲得に基づく社会経済的地位達成を意識したものである。そして、こうした学歴主義的価値観の「継承」もまた、現行の入試制度における達成を経験した母親たちの経験によって裏付けられているのである。

以上、現代韓国社会における大卒母親たちの教育観と教育戦略は「教育・学歴達成のストレス化」を中心的課題としていると言えよう。これは、精神的な苦痛を伴う受験、親の権威や子ども本人の能動性を欠いた進路決定の経験を持ち、それと引き換えたように教育と職業達成を遂げた母親たちのジレンマから生み出されたものである。

こうした学歴の意味や受験に対する社会的意味の変容について、日本の教育社会学者たちは既に様々な理論的説明を試みている。例えば竹内(2015)は、大学進学率の上昇、学歴達成による報酬の減少、入学試験の多様化によって、学歴が持つ社会的意味が次第に「やわらかな(p.159)」ものに変容し、学歴達成に向けた野心が縮小(「クールダウン」)される社会の様相を「受験のポストモダン」と呼んだ。その中では「受験から努力や勤勉の強迫観念が取り払われる(p.167)」と竹内は指摘し、受験は徹底した戦略と化したと述べる。

また、中村(2018)はそうした社会においては「学歴ベースのメリトクラシーに対して、教育拡大を契機として再帰的な眼差しが頻繁に向けられるように(p.177-178)」なったと指摘し、「学歴主義批判や受験学力批判をやめないが、かといって学歴主義や学力信仰を捨てきれずにいる(p.178)」様相が顕著化すると指摘する。本稿で取り上げた母親たちの教育観と教育戦略に関する語りは、広い目で見ればそうした時代の様相が現代韓国社会においても同様に見られることを示唆する。

しかし一方で、本稿で見られる韓国の「受験のポストモダン」あるいは「再帰的メリトクラシー」の特徴は、学歴達成の価値が温存されたまま、その方法論的問題として「ストレス」が中心的課題となっている点にあると言えよう。韓国において問い直されているのは、本田(2005)が「ポスト近代型能力」と名付けた「生きる力」や「人間力」あるいは「コミュニケーション能力」のような「非認知能力」の獲得ではない。韓国では、学歴の社会経済的価値は依然として認められたまま(問い直しの対象にされず)その達成方法のみが問い直され、その一つの結果として「英語」と「読書」が「迂回的」な教育・学歴達成のための戦略として支持されているのである。そしてそれは、かつての「受験地獄」を生きてきた個人に共有されている「学歴は大事だが、経済的、身体的、そして心理的対価が膨大である」という経験に基づいているとすることもできる。

こうした状況の中で現代韓国社会の親たちが直面している課題は、かつてのような「いかに学習効率の良い選択肢を選ぶか(例えばより合格率の高い塾や先生を選ぶ)」、あるいは「いかに経済的資源を子供の教育に注ぐか」といった課題ではない。現代韓国社会において子どもを育てる親たちは、「自然な学ばせること」や「好きにさせること」といった具合に、「いかに心理的な負担を伴わない(しかし「結果」には繋がる)選択肢を選ぶか」という課題に直面しているのである。そのためには、

子どもの心理的状況や適性に入念に気を配ること、既存の教育システムとの「接点」を持った自然でストレスのない学習方法を見つけること、進路選択における親の権威をなくし子どもの意思を尊重しつつも、社会経済的地位達成に繋がる選択を促すこと、といった「心理に関わるテクニックや知識」が求められている。それに対し近年増えている児童・発達・教育の心理学に基づく子育て論や親向けの自己啓発論の広まりは、「より良い子育て」、「より良い教育」への親の渴望を満たしつつ、より心理的な課題とより個人的な責任を親たちにもたらしだそう。

<引用文献>

- (1) 통계청(2017). 한국의 사회지표.
- (2) 李環媛「韓国における子どもの教育と家族」 小山静子・小玉亮子 編『子どもと教育—近代家族というアリーナ』日本経済評論社, pp.227-250(2018)
- (3) 이미정(1998). 가족 내에서의 성차별적 교육투자. 한국사회학, 32, pp.63-97.
- (4) 박병영·김미란·김기현·류기탁·이선형(2011). 교육과 사회계층이동 조사연구(IV): 1976-1986년 출생집단 분석. 한국교육개발원.
- (5) 교육부(2015). 2014년 사교육비·의식조사 결과.
- (6) 김경근(2005). 한국사회 교육격차의 실태 및 결정요인, 교육사회학연구, 15(3), pp. 1-27.
- (7) 이정환(2002). 가족환경, 과외, 성적., 한국사회학, 36(6), pp.195-213.
- (8) 양정호(2003). 고등학생의 사교육 참여요인 분석: 청년패널조사의 위계적 일반화선형모형연구, 한국교육, 30(2), pp.1-21.
- (9) 김현진(2004). 사교육비 지출 결정 변인 구조 분석, 교육행정학연구, 22(1), pp.27-45.
- (10) 이두휴(2008). 자녀교육지원활동에 나타난 학부모 문화 연구, 교육사회학연구, 18(3), pp.135-165.
- (11) 김미숙·상종열(2015). 중산층 밀집지역에 거주하는 중산층 학부모들의 자녀교육 문화: 분당구 사례, 교육사회학연구, 25(31), pp.1-30.
- (12) 김혜숙·한대동·김희복(2017). 학부모의 사교육 지원 현상에 관한 근거이론적 분석, 열린부모교육연구, 9(1), pp.65-92.
- (13) 황성희(2015). 중산층 학부모의 학교교육 인식과 사교육 선택, 학부모연구, 2(1), pp.93-117.
- (14) 오경희·한대동(2009). 학부모들의 학교교육에 대한 인식과 열망에 관한 이해, 열린교육연구, 17(3), pp.127-148.
- (15) 김양희(2009). 중학교 중산층 학부모의 교육문화에 관한 질적 연구, 고려대학교 석사학위논문.
- (16) 전현진·박성연(1999). 부모의 아동기 경험, 인성 및 결혼만족도가 양육행동에 미치는 영향, 아동학회지, 20(3), pp.153-169.
- (17) 이하정(2005). 조모세대와 모세대간의 자녀양육문화 변화에 관한 질적 연구, 생태유아교육연구, 4(1), pp.141-167.
- (18) 권용은·김의철(2004). 자녀가치와 출산율, 유아교육, 13(1), pp.211-226.
- (19) 오혜진·주경란(2004). 유치원아 부모의 사회계층에 따른 자녀교육관에 대한 세대간 비교연구, 아동교육, 13(2), pp.165-183.
- (20) Strauss, A. L. Corbin, J.M., *Basic of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory (2nd ed.)*. Thousand Oaks, CA: Sage

Publications, 1998.

(21)Charmaz, K., *Constructing grounded theory*. London: Sage, 2006.

(22)Creswell, J. W., *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches*. London: Sage, 2012.

(23)김뮤쥬온우쵸쵸 「韓國教育社會學研究の近年の動向と課題」『教育社會學研究』 100,pp.12-19(2017)

(24)신동일·김주연(2012). 초등학생 자녀의 영어교육에 관한 학부모 인식연구, 영어교육연구, 24(3), pp.277-298.

(25)이연옥(2004). 독서의 사교육화 현상에 관한 연구. 한국도서관·정보학회지, 35(3),pp.41-63.

(26)한국교육개발원(2018). 교육여론조사.

(27)竹内洋『立志・苦学・出世-受験生の社会史』講談社(2015)

(28)中村高康『暴走する能力主義-教育と現代社会の病理』ちくま新書(2018)

(29)本田由紀『多元化する「能力」と日本社会-ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版(2005)